

白家の冷酷若様に転生してしまった4

桃安

とうあん

桃家の総領息子。元は乱暴者だったが、とある薬を飲んでから突然優しい性格になった。

黒紫曜

くししょう

黒家の総領息子で碧玉の幼馴染。自称「碧玉の親友」で、何かと碧玉を頼ってくる。

灰炎

かいえん

碧玉の傍仕え。碧玉が気を許せる唯一の人物でもある。

雪瑛

せつえい

黒家を襲った九尾に仕えていた野狐。現在は碧玉の下僕として、白家で暮らしている。

桃如花

とうじょか

安の妹。病気がちで線が細く、性格が変わる前の安から虐められていた。

白天祐

はくてんゆう

白碧玉の義弟。碧玉とは従兄弟だが、祓魔の才能に恵まれていることなどを理由に白家本家の養子となる。白家の宗主。

白碧玉

はくへきぎよく

道術を使って魔を祓う祓魔業を生業とする一族・白家の総領息子。実は、前世の記憶があり、自分が義弟に殺される運命にある小説のキャラクターだと知っている。現在は隠居中。



目次

家守の鏡
やもり

雲海奇譚
うんかいきたん

大樹公と人の恋
たいじゅこう

7

189

271

家^や守^も
の鏡^り

一、桃家の噂

季節が巡り、七璃国の北部に位置する白家や黒家の領地でもすっかり雪が溶け、春爛漫の暖かさになった頃。

白碧玉と白天祐は連れだつて、黒家での花見の宴席に参加していた。

「黒宗主、お礼が遅くなりまして申し訳ありません。黄家での件、多忙な時期にもかかわらず、ご子息をお借りして助かりました。心ばかりの品を用意いたしましたので、ぜひともお受け取りいただけますか」

黒家の宴席といつても、身内だけの小規模なものだ。

碧玉は外出先では珍しく、仮面を外して、本来の姿で黒宗主である黒輝にあいさつをした。

碧玉は、世間では先帝からのいじめの末に賜死を言い渡されて、毒杯をあおつて死んだことになっている。後から追いかけてきた天祐が、浄火を使って体内の毒を浄化したおかげで、なんとか一命をとりとめたのだ。死刑にされたはずの人間が生きているとばれては都合が悪いので、表に出る時は仮面で顔を隠し、遠縁の雲銀嶺という架空の青年として過ごしている。

「天祐、何をぼんやりしている。謝らぬか！」

「ご迷惑をおかけして、大変申し訳ございませんでした、黒家の皆様！」

碧玉が肘で小突くと、左隣にいた天祐は慌てて謝った。

現在は、義弟である天祐が白家の宗主だ。天祐は碧玉にとっては従兄弟にあたる。

碧玉の父方の叔父と下女の間に生まれたのだが、母を出産で、父を幼少期に病気で亡くした。弟と仲の良かった碧玉の父は、天涯孤独となった天祐を憐れんで、直系に迎え入れたのだ。

天祐は生まれつきの天才的な道士で、宗主となるのはまったく問題ない。ただ、経験不足なので未熟な面はあった。

こうして天祐に謝罪させているのは、黄家で起きた「美女画の怪」という事件が原因だ。黄家に飾られている美女画に描かれた天女が碧玉にそっくりだったため、死後も碧玉が黄家を崇り、先々代の黄宗主と正室を殺したという悪評を立てられた。それに腹を立てた天祐が、単身で抗議をしに行った。

そこで天祐は、美女画に潜んでいた幽鬼をとつさに体に封じるという危険な真似をし、幽鬼に体に乗っ取られかけて、記憶があいまいになるという失敗をやらかした。碧玉が紫曜と共に黄家に潜入して、どうにか解決できたから良かったが、一歩間違えれば天祐自身も幽鬼に完全に体を奪われ、命を失っていたかもしれない。

碧玉と天祐のやりとりを見て、輝は困ったような微笑みを返す。

「白家には大恩があるゆえ、やつとお返しできたというのに……。このような土産をいただいてはかえって気まずい」

「その件は、黄家に乗り込むにあたり解消したと、黒公子に宣言しております。白家は受けた恩には報いますので、どうかお氣になさらず」

「そこまでおっしゃるなら、ありがたくいただきます」

貴族というのは面倒なもので、一度は受け取りを断り、再度すめられてからようやく受け取るという回りくどい礼儀がある。普段ならばただの形式的なやりとりにはすぎないが、今回ばかりは、お互いに心からの氣遣いゆえの会話だ。

輝が礼物を受け取ってくれたので、碧玉の肩の荷が下りた。義弟が迷惑をかけたので、義兄として氣をもんでいたのだ。

「黒宗主、すっかり晴れ晴れとしたお顔になりましたな。ご健康を取り戻されて、嬉しく思います」

「あなたがたが、九尾の件を解決してくれたおかげだ。ああ、これでは話が堂々巡りとなるので、この辺りにしておこう。今日は花見を楽しもうではないか」

黒家の庭には緑の敷物が敷かれ、その上に茶几や座布団が配置されている。桃の花が満開で、見事なものだ。

「この桃の木は、夫人が嫁いできた時に、記念として植えたのだよ。あちらは紫曜が生まれた時で、そこらは雪花が生まれた時のものですな」

眼光鋭く厳然とした趣のある輝だが、意外と子煩悩でもあるらしい。輝がまなじりにしわを刻んで、家族の祝い事のたびに桃の木を植えたと言語るのを聞いて、碧玉は胸の内が温かくなった。

「大事な花木が、九尾に荒らされずに済んで良かったですね」

「ええ、本当に。そうそう、今日は私の細君と娘がもてなしたいと、楽を演奏してくれるそうだ」輝の後ろに控えていた正室の桃春麗と、長女の雪花が微笑んでお辞儀をし、ゆつたりとした足取りで、演台のほうへ向かう。長男で後継者である紫曜は、雪花の肩を軽く叩いて、頑張れと応援した。

「さあ、お二人とも、こちらへ。紫曜も来なさい」

仲の良い兄妹の様子を微笑ましそうに見ていた輝は、紫曜も手招いて、宴席へ誘った。

黒家の母娘による古箏の演奏は、穏やかで抒情豊かだった。用意されていた黒領産の銘酒もおいしいく、酒肴も美味だ。

紫曜はご機嫌そうに笑う。

「いやあ、今日は佳き日だな。桃花は美しく、またそれに負けない美人が勢ぞろいときた。目が潤ってしかたがない」

「ああ、そうだな。桃夫人と雪花殿の麗しさは、花さえもかすませる」

碧玉が紫曜の言葉に頷くと、春麗と雪花がさざめくような笑い声を零す。

「まあ、お上手なこと」

「ありがとうございます」

お世辞だと分かっている、春麗と雪花は頬を赤らめて照れている。

「やめろよ、碧玉！ 母上と妹を口説くなよ。そもそもお前が真顔で褒めると、目に毒だ！」

紫曜が慌てて、横から言った。

「私にも美しいものを愛でる感性くらいはある。天祐もそう思うだろう？」

「そ、そこで俺に話題を振るんですか？ やめてくださいよ。この後で俺が同意しては、本音だろうと嘘くさく聞こえるではないですか」

碧玉に問われ、天祐は動揺している。

情けなく打ち明ける様子に、あちらこちらから笑いが起きた。

「ふふ。お褒めいただき光栄ですわ。さあ、どうぞ。お茶もご用意しております」

雪花が侍女に指示して、碧玉の茶几ちやづえに爽やかな香りのする緑茶を用意させた。

「雪花殿、かたじけない」

酒よりも茶を好んでいる碧玉は、ありがたく緑茶を味わう。一方、天祐は黒家の銘酒を気に入ったようだ。

「紫曜殿、こちらの銘酒、美味しいですね。まろやかで飲みやすいです」

「おお、さすがは天祐殿。目利きだな。青領せいりょうほどではないが、黒領も美味しい酒を造れるのだ。清らかな水の湧く山があちこちにあるのですね。とはいえ、運ぶのは労力がかかるため、少量しか造れぬのだが」

「では、とっておきを出していただいたのですね。お氣遣いが嬉しいです」

「どういたしまして」

自慢の品を褒められた紫曜は、からからと笑っている。天祐と酒杯を交わして、乾杯をした。

二人のやりとりを眺め、こうしていると天祐もただの好青年なのだと、碧玉は不思議な気持ちになった。それというのも、天祐は碧玉に不利益があると、途端に冷酷な面を見せて、非情な真似をするのを知っているせいだ。

「我が妻と娘よ。どうか私のことも忘れないでくれ」

客に氣をとられている妻子に、輝が笑いながら話しかける。

「嫌だわ、あなただったら。忘れるわけがないでしょう？」

「そうですね、お父様」

春麗と雪花は、輝の茶几ちやづえに近づいて、和氣あいあいとおしゃべりに興じ始める。

それを横目に確認すると、紫曜がわざとらしく咳払いをした。

「なあ、ところで、天祐殿。黄家での件で、あなたは私に借りを作ったと思うのだが……」

「黒紫曜、いったい天祐に何を言うつもりだ。また親戚の争いの仲裁でもしてきたのか？」

紫曜の不穏な切り出しを警戒し、碧玉はすぐに口を挟む。

「仲裁ではない！ そもそも碧玉には言っていないぞ」

「お前が何かと面倒事を持ちこむから、先に釘を刺しているのではないか」

「そつ、それはそうだが。とにかく話を聞いてくれ！」

分が悪いと踏んだのか、紫曜は声を張り上げた。天祐が苦笑して、碧玉を制す。

「兄上、ひとまずお話を聞きましょう。私が紫曜殿にご迷惑をおかけしたのは、事実ですから」

「ふん」

気に入らないものの、碧玉はくいつと顎を振って、紫曜に先を促す。紫曜は会話に本腰を入れる姿勢をとった。

「ごほん。私の母上が、桃家の出身なのは知っているな？ 桃家が薬草の扱いに優れ、優秀な医者も多く輩出していることは有名だと思う」

「ええ。医者、薬師、学者などを出しているだけでなく、領地には薬草園もあるとか。桃家が運営している薬堂で扱っている薬草は、質が良いと聞きますね。兄上のために、家臣に命じて膏薬を買いに行かせたことがあります」

天祐は思い出すように言った。

（私の傷痕を治すために、良い薬があると聞けば取り寄せていたが、桃家の薬堂のものもあったのか）

碧玉は旅に持参した膏薬を思い浮かべた。

以前、天治帝からのいじめの標的になり、何かと理由をつけて、鞭で打たれたことがある。背中とふくらはぎが多かったせいで、碧玉の体には今も古傷が残っている。天祐はその痕を消し去りたいと言って、薬の情報に耳ざといのだ。

紫曜は話を続ける。

「その桃家だが、実は当代の後継者である息子は、乱暴者で評判が良くなかった。だが、直系の男が彼しかいなくてね。しかたがなく、後継者として育てていたのだ。その桃家の若君が、ある時、病気を治したら、性格がすっかり優しくなったという噂がある。別人になりかわったかのよう

だとも言われているよ」

「その桃家の若君は、紫曜の従兄弟ではないか？ 会ったことくらいあるだろう」

まるで他人事のようだとつぶかしむ碧玉に、紫曜は首を横に振る。

「いや、桃安殿には会ったことはないよ。あちらのほうが年下であるし、黒領からは桃領は少し遠くてね。そもそも桃家の直系は、ほとんど領から出てこない。薬草の世話で忙しいからな」

「だが、宮廷の侍医をしていなかったか？」

「あれは分家だよ」

「黒家と似たような家風だな。……ところで、天治帝に仕えていた側室にいたのは？」

「そちらも分家の者のはずだ。もちろん、宗主は必要な行事には出席するが、子息子女は滅多に出てこないんだ。我が母上もそうなんだが、薬草を育てていれば満足という気質のようですね。直系に近いほど、交流は不向きなんだ」

紫曜の返事を聞いて、気まずそうにしていた天祐は、安堵の息をついた。碧玉を賜死に追いこんだ天治帝とその妃らに、天祐は呪物を送りつけて、祟り殺したのだ。元はあちらが悪いとはいえ、さすがの天祐でも、目の前にいる紫曜の親戚だと思うと気になるらしい。

「話を続けるぞ？ 別人のように性格が落ち着いたという噂を聞いて、黒家のほうの親戚から相談をされたんだ。桃安を治した薬があれば、自分の家の乱暴者も落ち着くんじゃないか、と」

「ふむ。読めたぞ。その薬を手に入れてほしいと嘆願されたのだな？ まったく、皆の兄貴を自称するから、上手く利用されるのではないか」

碧玉は鼻で笑い、この幼馴染をからかうことにした。

「私が予想してやろう。その親戚はこう言ったのではないか？『どうかお願いいたします。桃家とゆかりのあるお母上をお持ちの若様にしか、頼めないことなのです！我が家を救うと思って、どうかお助けください！』……どうだ？」

紫曜は絶句した。

「お、お前……！なんでそんなにそっくりなんだ！まるで会話を傍で聞いていたみたいじゃないか」

「誰が盗み聞きなどするか。貴様が『助けて』という単語に弱すぎるだけであろうが」

馬鹿馬鹿しいことだと、碧玉は冷たく返す。

そんな碧玉を、天祐は目を輝かせて熱く見つめる。

「兄上、なんと素晴らしい演技力でしょう。何をされてもお上手で、弟として鼻が高いです」

「天祐殿？こんなことを褒めなくていいと思うが……」

紫曜がぼそぼそと言ったが、天祐には聞き流された。

「それで、どうなったのだ」

碧玉が続きを話すように促すと、紫曜は居住まいを正してから口を開く。

「ああ、それで、私も頼まれたからと桃家に交渉したんだよ。だが、貴重な薬草を使っているからと断られてしまってたね。それでも粘りに粘って、約束を取り付けたんだ。自分で桃領にある霊山〈深山〉に薬草を採りに行ったら、薬を作ってくれると！」

「桃家もかわいそうに。しつこくて嫌になったのだろう」

「もちろん、桃領の貴重な薬草なんだ。ちゃんとお礼はするさ！」

碧玉の皮肉に対し、紫曜は礼儀は示すと宣言した。

「許可をしてくださったのなら、採取しに行けばいいのでは？」

天祐が首を傾げると、紫曜はそこが問題だと訴える。

「ただの霊山ではないんだ。謎かけをする虎の妖怪が棲んでいるんだよ。答えを間違えたら、喰われるんだ。おっかないだろう？だから、問答無用で追い払える強い道士に手伝ってほしいというわけだ」

「つまり、私に護衛をしてほしいと？」

「いや、護衛はしなくていい。ただ、妖怪退治を頼みたいんだ。私だつてある程度は妖邪の相手くらいはできるんだが、あそこの虎は格が違うんだよ」

「私は構いませんが……」

天祐は返事に困って、碧玉の顔色を窺う。

「天祐が行くならば、私もついていくぞ。黄家での一件で、こやつに単独行動をさせると、厄介なことになると学んだばかりだ。不安でしかたがない」
すると、紫曜の表情がぱあっと明るくなった。

「おお、では、引き受けてくれるのか！二人がいれば千人力だ！いやあ、助かった。よし、気が変わらぬうちに、契約書を交わそうではないか」

「落ち着け、紫曜。花見の宴席中に、ばたばたと騒々しい」

宴の途中だというのも忘れて飛び出していきそうな紫曜を止め、碧玉はうんざりしてため息をついた。

厄介だと分かっているのに、気が付けば紫曜の頼み事を引き受けるはめになっている。思えば昔からこんな感じだった。

（これだから腐れ縁というのだ……）

改めてそう思った。

黒家での花見の宴会が終わり、碧玉達は白家に戻ってきた。

帰ってくるなり、今度は桃領に行くということで、白家内は旅の準備に追われてばたばたしている。

雑事は全て家臣に任せ、天祐は碧玉の居室である離れで、遅い昼食をとっている。

夕食まで時間が短いため簡単なものと言っておいたので、厨房から惣菜が入った焼餅が用意された。

碧玉は熱々の焼餅を手で割って、一口大につまんでは口に放りこむ。中身は碧玉の好きな山菜と野菜を甘辛く煮たものだった。

「兄上がお召し上がりになると、焼餅ですら上品な料理に見えますね」

天祐は微笑して言い、あつという間に一つを平らげる。小さくちぎって食べているのに、呑みこ

むのが速いので、碧玉が半分食べた頃に、一つ食べ終えてしまっている始末だ。

「天祐、訳の分からないお世辞を言っていないで、よく噛んで食べなさい」

「はい、すみません。……本当にそう見えるのに」

天祐は素直に謝ったが、すねた口調で付け足す。

碧玉に注意されたので、天祐は二個目の焼餅はゆっくり食べたが、それでも碧玉より速い。

「そんなに空腹なのか？ もっとしっかりした料理を運ばせよう」

「いえ、二つで十分です。あまり食べると、執務中に眠くなりますので」

灰炎に言いつけようとする碧玉を止め、天祐は遠慮した。食後の茶に手を伸ばし、深いため息をつく。

「はあ。旅の準備をするように言ったら、また留守にするのかと、家臣に呆れた顔をされました。事情を知る者からは、兄上に気苦労をかけないようにと、密かに注意を受けましたよ」

「家の主がこうも頻繁に留守にしては、家臣も文句を言いたくなるだろう。それにお前は、黄家に outcomes 出かけていって、音信不通になった前科者であるし」

「そんな罪人みたいな扱いをしなくても！」

「ついこの間のことから、家臣も良い顔をしないのが当たり前だと言っているだけだ」

碧玉が言外に反省するように言い含めると、天祐はししぶと頷いた。

「しかし、白家は道士として七隣国全土から頼りにされている。宗主自ら解決に向くのはよくあることで、家臣も不在には慣れているはずだ。騒ぐことでもない」

「政務が滞るのもありますが、恐らく文句があるのは、私が兄上も連れていくからだと思います」
「なぜだ？」

「それはもちろん、皆、兄上のご健康を心配しているのですよ。私も気持ちは分かるので、罪悪感がひしひしと」

天祐は基本的には善良な若者なので、良心が痛むと分かりやすく困った顔をする。

「ふむ。そういうことならば、私だけで行ってきたてもよいが」

「逆ですよ、逆！ 私だけで行くべきなんですよ、こういう時は」

「しかし、私はまだお前を信用しきつておらぬゆえ、お前を野放しにする気はない。黄家での件、つい昨年末のことだ」

「ううう」

碧玉の皮肉たっぷりな指摘を受け、天祐はがくりと頭を垂れて、膝を見下ろした。

「それに、〈深山〉にいる妖怪は、謎かけをするのだろうか？ お前よりも私のほうが適任ではないか」

碧玉は焼餅シヤオピンを小さくちぎって、丁寧に食べる。ようやく一つを食べ終えた。茶杯を手に取り、青茶で口をさっぱりさせる。

「兄上のほうが見識豊かでいらっしゃるのは事実ですけども！ あつ、兄上、まだ二つ目がございますよ。きちんと食べてください」

「十分だ。灰炎、そなたに下げ渡そう」

近くに控えていた灰炎は心配そうに問う。

「主君、本当にこれだけでよろしいのですか？ お体の調子が悪いのでしょうか。医者を呼んでまいます」

「待たぬか、馬車に酔ったせいで、食べたくないだけだ。それにどうせ、夕餉ゆうこうの時間も近い。そちらで食べよう」

灰炎が医者を呼ぼうとするので、碧玉は止める。

そこへ、離れの扉番の衛士が訪問者を告げた。

「失礼いたします、灰炎様。お客様がお越しです」

「確認してまいります」

灰炎が離れを出て行き、すぐに戻ってきた。

「主君、医者殿と崔さい殿がおいでです。通してもよろしいですか」

「ああ、通せ」

碧玉が返事をする、灰炎は医者と崔さい白蓮びやくれんを連れて戻ってきた。二人は拱手をしてあいさつをする。

「主君、〈深山〉に行く予定とはまことにございますか？」

碧玉がなんの用かと問う前に、医者が鬼気迫った表情で問う。碧玉は少し驚いて目を瞠みはる。医者の老人は、普段は落ち着いているので、こんなふうに慌てることがないからだ。

「そうだが、いったいどうした？ ひとまずその座布団に座るがよい」

ここには来客を応対する几や椅子などはないので、灰炎に適当な座布団を用意させた。二人が着席すると、白蓮が先に口を開いた。

「旅のお疲れが残っているでしょうに、お騒がせして大変申し訳ございません。私は医者殿を止めたのですが聞き入れてくださらないので、しかたがなく付き添ってまいりました」

白蓮は眉を八の字にして、困った顔をする。

「〈深山〉と聞いて、急いで参ったのではございませんか。私は若い頃、あの山にいる妖怪の虎に出くわして、死ぬような思いで逃げ帰ってきたのですよ」

「ああ、そういえば前にそんな話をしておったな。正解したので見逃されたのだったか？」

「そうです！ 若い頃は、医者としてあちらこちらを遊歴し、桃家でも学ばせていただきました。あちらの薬草園の素晴らしいことといったら！ 私があまりに熱心なので、あの家の聖地である〈深山〉へ立ち入る許しを特別に得ました。そしてうっかり奥まで入りこんでしまい、あの虎に会ったのです」

七璃国で桃家といえ、医者や薬師にとっては憧れの学び先である。師事したい者が多いため、桃家は学舎も開校している。試験に合格しても、学べるのは年に二十名だけだとか。

（そういえば、この医者は白雲の地では一番の名医であつたな）

さすがは白家抱えの医者だけあつて、この老人は優秀なのだ、碧玉は思い出した。碧玉が幼い頃から、まるで世話焼きの爺やみたいに傍に居るせいで、すごさを実感できていなかった。

「碧玉様、いくら宗主様が一緒とはいえ、あの地は危険でございます。近づかないほうがよろしい

かと！」

医者は息巻いて忠告した。碧玉は面倒くさくなって、ため息をついた。

「まったく、何を慌てているのかと思えば、そんなことか。そなた、忘れておらぬか？」

「何をです？」

「そなたは医者で、私や天祐は道士だ。妖怪の相手は、こちらが専門だ。そなたは専門外ゆえ、逃げ帰るのが道理というもの。我らが妖怪の言うことをいちいち真に受けるとでも？ 妖怪が余計な真似をするなら、浄火で滅するまで」

碧玉が冷たく言い放つと、医者は面食らって身じろいだ。

「ああ、そうでした！ 若君はそういうお方でしたな。まったく……私も年をとりましたなあ。こんなことで若君を心配するとは」

「その過去がそなたにとって、よほどのことであつた証左であろう。この無礼は聞き流しておくでしょう」

碧玉は天祐をちらりと見た。

「それに、ここにはうっかり幽鬼の扱いを間違える粗忽者そこつものもいるのだし」

「兄上、黄家の件を当てこすらないでくださいよ」

「ふん」

弱った声を出す天祐に、碧玉は鼻で笑って返す。

「そんなに心配しているようでは、こたびもついてくる気か？」

碧玉が医者に問うと、医者は青ざめた顔でぶんぶん頭を横に振る。

「とんでもございません！ 私はあの地は恐ろしくございますし、何より老いた身にはいささか遠すぎます。私の弟子をつけますから、お連れください。前から桃領に行きたがっておりますし」

「では、そうしよう。崔師父も残るのですか？」

碧玉が問うと、白蓮はわずかに身を乗り出した。

「今回は同行いたします！ 〈深山〉の妖怪についてはもちろん、桃家の長男の性格が突然落ちていた件が、個人的に気になるのですよ」

「何がそんなに気になるんです？」

天祐がげんそうに白蓮に問う。

「急に反抗期が落ち着いた主君を思い出して、懐かしくなりましてね。やはり大世家の若君ともなると、心理的重圧でそうなるのでしょうか」

「何？」

思わぬ指摘をされた碧玉は目を丸くし、白蓮は失言をしたかと焦りを見せる。

「失礼しました。主君のご気性は苛烈なところはございましたが、後継者として日々研鑽けんさんされていたのも存じておりますゆえ。あのくらいの年齢では、あのようなものですし……」

「崔殿、やめなさい。黙っていたほうが身のためですぞ」

「申し訳ございません」

医者に注意され、白蓮は首をすくめた。医者は白蓮をたしなめた口で、しみじみと思い出を掘り返す。

「しかしまあ、崔殿のおっしゃることも理解できますぞ。反抗期が落ち着くまでの主君といったら、やんちゃがひどくて心配しておりました。覚えておりますか。無実の民を邪術師ではないかと疑って、尋問したりなど……」

医者はよりによって、碧玉の子どもの頃の黒歴史を引き出したので、碧玉は冷笑を浮かべた。

「そんなに仕事をしたいなら言えばよろうに。弟子に任せてばかりで退屈ではないか？ 久しぶりに、薬剤保管庫の整理をしてはどうだ」

「そのような雑用を私に？ —— ああつと、いけませんな。そういえば弟子に用事があるのでした。用件は済みましたので、私はこれにて退室いたします」

医者は分が悪いと悟って、そそくさと立ち上がる。

碧玉とて、このような老人に薬剤保管庫の整理なんていう重労働をさせるつもりはない。半分冗談だ。医者は碧玉とは長い付き合いなので、彼も碧玉が本気で言っているわけではないと分かった上で、下手な芝居をしているだけだ。もし碧玉が本気で怒っていたら、すぐさま土下座していたはずだ。

「待たぬか。医者、本当に崔師父のおっしゃるような薬があるのか？ 性格が変わるものだろうか」

「そうですね、症状によりますよ」

医者は首をひねり、顎^{あご}を手で撫でながら答える。

「気が昂り寝付けない場合に、鎮める薬ならあります。睡眠不足では気が短くなりますので、改善いたしますね。他には女性ならば、月のものの影響で怒りやすくなりますので、それを和らげる薬もございます。そういう意味でなら、気性を落ち着かせるといえるでしょう。しかし、性格が変わるほどとなると……」

医者はううむとうなる。

「崔殿は主君の若い頃を思い出しますが、私に言わせれば、主君の性格は何も変わっておりませんから。奥様そっくりの苛烈な気性に、旦那様そっくりの情の深さです。あなたがただ冷酷なだけではないことを、私はよく知っておりますからな」

ふいうちで医者に胸に響くことを言われ、碧玉は一瞬、答えに迷う。

「……ふん。相変わらず口が回ることだ。用がそれだけなら、下がるがよい」

「ええ、御前を失礼いたします」

「私もこれで」

医者は微笑を隠さず、白蓮と共に退室の礼をして、離れを出て行つた。

天祐は口元を緩ませて、碧玉に指摘する。

「兄上、耳が赤くなっておりますよ」

「敬愛する父母に似ていると言われ、嬉しくない者などいるか？」

「ふふ」

碧玉は天祐をじろりとにらみ、すっかり冷めた茶を飲む。

そこでふと、白蓮が何げなく口にしたことを思い浮かべた。

（紫曜から聞いた時は何も思わなかったが、『別人のように性格が落ち着いた』という表現は、いささか大げさではないか？ 気性が落ち着いたなら分かるが、わざわざ性格と言うからには、よほど変わったのだろう）

碧玉が気になったのは、白蓮が指摘したせいだ。彼は道士として優れているだけあって、第六感で何か感じとったのかもしれない。

（まさか桃安は私のように、前世の記憶を思い出した……というわけではないだろうな。いやしかし、私という例があるから否定もできぬ）

考えるうちに、険しい表情をしていたようで、天祐が心配そうに問う。

「兄上、もしやご気分が悪いのでしょうか。医者を呼び戻しましょうか」

「いや、なんでもない。天祐、食事を終えたのなら、執務室に戻りなさい。また夕餉^{ゆうげ}の時に会おう」

「あっ、そうでした。兄上、くれぐれも無理はしないでください。灰炎殿、頼んだぞ」

「はい」

天祐は念押しし、何度も振り返りながら離れを出て行く。

（私は桃安になど会ったことはない。前世で読んだ書物でも覚えがないな。考えても分からぬことはどうしようもない。ひとまず〈深山〉について情報収集をしておくとするか）

日が落ちて邸内が寝静まったのを見計らい、碧玉は羽織を頭から被り、顔を隠して離れを出た。碧玉が天祐の執務室の前まで来ると、扉を守る衛士が碧玉に向けてさっと拱手をしてから、中へと声をかける。

「宗主様、銀嶺様がおいでです」

「何？」

中からガタンと椅子が鳴る音がして、バタバタと騒がしい足音が続く。衛士が扉を開ける前に、内側から扉が開かれた。すでに役人が帰宅した時間帯のせいかな天祐は気を抜いているらしく、若干着崩した格好をしている。

「何か問題でもあったのですか？　こちらまで足を運ばれずとも、私を呼びつけてくださればよろしいのに」

「たまには私がこちらに来てもいいだろう」

心配をあらわにする天祐に、碧玉はそう返す。ずっと離れにいるのも退屈なのだ。

それから懷から呪符を取り出して、依り代にフツと息を吹きかけて印を結び、衛士の姿をした式神を呼び出す。碧玉は式神に命じる。

「何かあれば扉を叩くように。そなたは下がって休むがよい」

「はっ。ありがたき幸せ」

衛士は礼をして、扉の前を離れた。入れ替わりに、式神が守りにつく。

天祐は小声で碧玉を呼ぶ。

「兄上」

「なんだ、私が衛士を下がらせたのが気に食わぬか？」

天祐の傍近くにいる家臣は古参ばかりなので、碧玉の正体についても知っている。だから先ほどの衛士は天祐の命令ではないのに、二つ返事で従ったのだ。

天祐は首を横に振った。

「そうではありませんよ。はあ、しかたがありませんね。ひとまず中にお入りください」

「邪魔するぞ」

「お邪魔なことがありますか」

天祐はすぐさま言い返し、碧玉の手を引いて中へと招き入れる。そして、扉を閉めて内側から鍵をかけると、呪を唱えて扉に結界術をかけた。

「これでいいですね、防音にもなります」

「人払いならば済ませたが」

「念のためですよ。兄上の正体を知らない使用人もいるんですから」

「そんな新参者では、宗主の執務室に近づけるとは思えぬが」

だいたいにして使用人というのは、主家の人間を畏れてむやみに近づかないものだ。それに加えて、宗主に近づける立場の使用人は限られる。

碧玉は執務室を見回した。

「この部屋も久しぶりだな」

父である白青炎せいえんに続いて、碧玉も使っていた執務室だ。あくまで仕事部屋なので、宗主の居室は別にある。天祐も今はそちらを居室として使っている。子どもの頃に使っていた黒雲室くくうんは風呂場用に、その後に住んでいた白月室はくげつは碧玉の離れに改装したのだ。

「内装には手をつけておりませんよ、椅子を替えたくらいです。私には高さが合わなかったもので」

家具に手を加えたことが気まずいのだろうか、天祐は言い訳をするようにつぶやいて、卓のほうへ向かう。水差しから、焼き物の杯へと水を注いだ。

「家具など好きに替えればいい。今の部屋の主人はお前だ」

「そうは言っても、私にはまるで聖域を侵害しているようで、いたたまれないですよ。ところで兄上、申し訳ありませんが、使用人は先に休ませたので水しかありませんよ。茶が良ければ青鈴せいりんを起こしましょうか」

「必要ない。水で構わぬ」

碧玉は特に水もいらなかったが、天祐の気遣いを受け取った。

「私のことは気にするな。飲みたければ勝手に飲む。資料を見るぞ」

「ええ、お好きにどうぞ」

碧玉は羽織を手近な椅子の背に引っかけると、書棚に向かい、他世家の情報をまとめている書類を選ぶ。桃家の記録を数本抜き出した。最新情報が書かれた書類は、宗主の執務室にしか置いてい

ないので、散策ついでに読みに来たというわけだ。

天祐は碧玉の手元を見て、首を傾げた。

「こちらをお探しだったんですか。資料ならば、灰炎殿に言付けてくだされば離れに運ばせますのに……」

「我が家に帰宅した日くらい、お前と共に過ごそうかと思っただけだ」

「まさか……寂しくていらつしやるのですか？」

「旅の間は四六時中隣にいただろう。急に一人になると、どうも変な感じがするのでな」

「兄上！」

天祐は感極まった声を出して、水の杯を卓に置くなり、碧玉を後ろから抱きしめた。

「嬉しいです。そんな気持ちを察せず申し訳ございません。この天祐、喜んで一緒におりますとも！」

天祐はそう言うと、碧玉が大声を出すなど注意する前に、碧玉を腕に抱え上げた。碧玉は竹簡を落とさないように、急いで抱えなおす。

「おい、突然抱き上げるな。驚くだろう」

「すみません」

碧玉の文句に、天祐は謝ったが、笑顔のままで声は弾んでいる。そのまま執務用の椅子に腰かけ、碧玉を膝の上に横向きに座らせた。

「読むだけなら、これでも大丈夫でしょう？ 本来なら、すぐにでも離れまでお連れしたいところ

ですが……。私の力量ではもう少し仕事を片付けないと出立までに間に合いません」

「責任を持って仕事をするのはよいことだ」

天祐が自分で仕事を配分してこなしているなら、碧玉が手を貸しすぎるのは良くない。領地運営の実力を伸ばすには、場数をこなすしかないのだ。

（しかし、このように睡眠を削るのは体に悪い。灰炎に命じて、いくばくか書類を持ってこさせるか）

天祐が特に苦手としているのは、金銭関係の取り扱いだ。手本を示すという言い訳で、碧玉が少しくらい量を減らしても、天祐の経験には繋がるだろう。灰炎ならば「十分に甘やかしてますよ」とからかうだろうことを、碧玉は考えた。

それにしても、天祐に比べれば細身とはいえ、碧玉もそれなりに背はあるほうなのだが、天祐はこんな姿勢で仕事をしづらくないのだろうか。

碧玉は書類から視線をずらし、天祐の書類のほうを見た。天祐は真剣に読んでいるようなので、碧玉のせいで読みにくいということはなさそうだ。

「なんだ、裁判か？」

「ええ。農地関係の小競り合いですよ。放っておくと流血沙汰になりやすいので、早めに片付けておきたいんです」

宗主には、領地における裁判官という顔もある。宗主のもとに来るような問題は、下位の者では判断に困った内容となる。今回のような土地の境界線でのめんどろは、税收にも関わるので、宗

主まで来る場合が多い。

碧玉は書類を一瞥して、答えを出す。

「ふむ。土砂崩れが起きて、田の境があいまいになりもめているのか。役人を派遣して、測量させよ。それぞれの土地の大きさは税の書類に記録があるから、それを元に分割しなせばいい」

「えっ、それぞれが主張する土地の境界目印は気にしないでいいんですか？」

「ああ。つまりは土地の大きさが、元と同じであれば問題ないのだ。あくまで推測だが、このめんどろの大本の原因は、水利の利便性によるかもしれぬな。役人に、その点の便宜をそれぞれにはかるように言っておけ」

「ああ、下流側が上流側に不満を抱きやすいからですね。なるほど」

天祐の声が明るい調子になり、さらさらと筆で書き記していく。きちんと教育を受けただけあって、天祐の字は力強く読みやすい。呪符を扱う道士にとって、文字の間違ひは術の不発に繋がる。面倒くさがって崩し字を書くとは厳しく叱責されるため、他世家に比べれば、白家には字が上手い者が多いだろう。

碧玉は綺麗な字が素早く書き足されていくのを眺めていたが、ふと執務机の上を見た。筆掛けの傍に、碧玉が天祐に贈った香袋が引っかかっている。玉房結びの飾りがついた、白絹の袋だ。緑の糸で柳の葉が刺繍されている。

「おい、天祐。その……それはなんだ」

碧玉の動揺が声に出た。

こうして改めて見ると、自分の刺繍ししゅうの拙さが、急にいたたまれなくなってきたのだ。

天祐はいったん筆置きに筆を置いた。それから碧玉が示すほうを見る。

「これはもちろん、兄上がくださった香袋ですよ」

「どうしてそんな所に置いている？」

「外出の時はもちろん身に付けておりますが、執務中はそこに掛けているんです。視界に入るだけで励まされますので！」

天祐は嬉々として答えた。

「今は本物の兄上が傍にいますので、更に元氣が出ますよ」

「……いや、そんなことは聞いていないが」

贈り物を大事にしてくれるのは嬉しいが、それが自分の作品だと思おうと直視しづらい。気まずげに眉間にしわを刻む碧玉に、天祐は不思議そうに問う。

「何かご不興を買いましたか？ 墨で汚さないように気を付けておりますが……」

「そうではない。こうして見ると、もう少し練習してから贈れば良かったと、後悔してしまううけだ」

「何をおっしゃいますか。裁縫など自分の仕事ではないとおっしゃる兄上が、わざわざ作ってくださったのですから、それがいいではありませんか」

天祐はふうと息をつく。

「実を言うと、兄上からこうして香袋をいただくまで、家族の手仕事に真心を感じるとい言葉の

意味が、私にはよく分かっておりませんでした。実の母は私を産んだ時に亡くなりましたから、家族の真心を感じられそうなものは、母が縫ってくれた産着くらいしかありませんでしたからね」

「そうだったのか」

天祐から遺品の話を聞くのは初めてだ。元々、天祐はあまり実の両親について話さない。

「母のものはそれくらいですが、父の遺品や財はいくつかありますよ。櫃ひつに一つ分くらいでしょうか」

白家はこの国の七大世家の一つだ。その家の直系に生まれた次男が家を継がないからといって、財産を与えずに放り出されるわけもない。碧玉はふと、白家の財産目録を思い浮かべた。自分の両親が亡くなった時に見た覚えがある。

「そういえば叔父上の屋敷や畑は、お前のものだったか」

「ええ。私が白家に引き取られた時に、青炎様が管理人を決めてくださったので、そのままにしています。管理代であまり利益は残りませんが、年に数回の報告は受けていますよ」

つまり碧玉の祖父は、叔父が家を出る際に、暮らすには困らない程度の財を分けたということだ。大世家の次男としては財産分与が少ないほうだが、恐らく下女との婚姻でもめたのではないだろうか。普通ならば、裕福な家と縁づくために政略婚をさせられるものだ。

（祖父母は私が二歳になる頃には亡くなっていったそうだから、私も叔父とのあれこれは詳しく知らぬのだよな。父上はたまに叔父を家と呼んで、楽しそうにお茶をしていたし……）

青炎と青祥せいしょうという兄弟の仲は良かったが、下女との婚姻は貴族家ではさぞもめただろうというこ

とは、碧玉の母である緑翠花^{りよくすいか}が天祐をあからさまに嫌っていた態度で分かる。

他家ならば縁を切って追い出すくらいはしそうだが、叔父が少なくとも財産を分けてもらえたのは、白家の血縁者だからだろう。白家の霊力の高さは血で受け継がれるもので、直系のほうが強いのだ。それについては、天祐が証明している。つまり、血縁者を追放するのは、貴重な戦力を手放すのと同じ意味になるからだ。

「そなた、私の母上から冷たい扱いをされて暮らすより、叔父の屋敷でそのまま育つほうが良かったのではないか？」

「そうですね、引き取られたばかりの頃は、慣れ親しんだ家を離れるのが嫌でそう思っておりましたが、今は感謝しております。あの家にいれば最低限の生活はできたでしょうが、幼い子どもが家主では、早々に賊に入られて殺されていたかもしれません。この世がいかに物騒か、今の私はよく知っていますから。それに……」

「なんだ？」

「おかげ様で、兄上とはこうして香袋をいただけるまでの仲になりましたから。それもこれも、白家の直系に入れてもらったからです」

天祐は目尻を緩ませて、温かく微笑んだ。今は幸せだというのが、一目で分かる。

「……そうか」

なんだか碧玉は気恥ずかしさを覚えた。天祐の肩にもたれかかることで、顔が天祐から見えないようにした。

「しかし、話を聞いていると、お前の乳母は大して仕事をしていなかったようだな」

前世で読んだ小説『白天祐の凱旋^{がいせん}』では、天祐にとって乳母は大きな存在だったはずなのに、碧玉は不思議に思う。

「身の回りの世話はしてくれていましたけど、乳母は人の目が無いところでは、実子を優先しておりましたからね」

天祐が暮らしていた黒雲室の手入れの雑さを思い出すと、乳母のその態度も、叔父の立場の弱さを表していたのかもしれない。

「はあ、情けない。私はお前の財など、気にしたこともなかった」

「ですが、私自身のことには気にかけてくださっていたでしょう？ もちろん、青炎様が管理人の手配をしてくださったのはありがたいですが、寒さに震えていた日に届いた炭の恩は忘れておりませんよ。奥様と対立してでも私に手を差し伸べてくださった慈悲こそ、子どもの私には必要なものでした」

天祐はそう言うとうそを屈めて、碧玉の額に口づけを落とす。そして、深いため息をついた。

「はあ、駄目だ。仕事はここで切り上げます」

天祐は碧玉の手から竹簡を取り上げ、執務机に置く。

「もう少し仕事をするのではなかったのか」

「こんな話をしていたら、兄上への感謝と愛おしさがこみあげてきて、それどころではありません」

「……私も邪魔をした自覚はある。後で書類をいくつか、私に回しなさい」
碧玉の言葉に返事する代わりに、天祐は碧玉の口を塞いだ。

天祐は唇だけでなく、頬にも小鳥が戯れるような口づけをする。

くすぐったさに碧玉がつい笑ってしまうと、ふと目が合った。その力強い目の輝きに引かれるように、碧玉から唇を合わせる。

「兄上から口づけてくださるなんて、嬉しいです。でも、やっぱりこれだけだと物足りませんね」
「んっ」

天祐は微笑んで、碧玉の下唇をやりわりと噛む。それに促されて口を開けた途端、噛みつくような口づけに変わった。すぐに熱い舌が入りこんできて、碧玉の口内を蹂躪する。

「ふっ、んん」

碧玉が口づけに応えるのに気を取られているうちに、天祐は碧玉の寝間着の合わせに手をかけた。帯が解かれて、床に落とされる。天祐は眉を寄せた。

「春とはいえ、まだ夜は冷えるのですから、こんな薄着で邸内を出歩かないでください」

「脱がしながら言うことか？ やめても構わぬが」

碧玉が文句を返すと、それは嫌だと天祐は首を横に振る。

「どうせこれから暑くなりますよね」

「それはそうだろうが……あっ」

天祐の右手が、するりと碧玉の背中を撫でたので、碧玉はびくりと身を震わせる。その喉元に天祐は甘く噛みついて、噛み痕をなぞるようになめた。天祐は左手で衣をだけさせるとあらわになった肌に触れ、胸の飾りを指の腹で押す。

「んっ。お、お前も脱がぬか」

碧玉だけ肌をさらして、天祐は仕事着のままだというのが、どうも癪に障る。

「……仕事着？」

そこで碧玉は、ふと我に返った。

領主の執務室とは、役場の一部でもある。閉門した今は役人がいないとはいえ、ここは公の場でもある。あつた。

「そういえば、ここは執務室であつたな……。さすがに不謹慎ゆえ、場所を変えるか？」

碧玉がそろりと天祐の膝から下りると、後ろから腕が回されて引っ張られ、すぐに膝の上に戻るはめになった。

「こら、驚くだろう。あっ」

「今の時間帯は役所ではありませんから、気にせずに」

肩から衣を落とされて、素肌が空気にさらされる。その肩に、天祐は後ろから吸い付いた。ちりつとした痛みがして、碧玉は痕を残されたことを知る。天祐は碧玉の背中に残っている鞭の痕に口づけながら、自分も衣を脱いでいく。乱雑に床に放り投げられる衣を、碧玉は目で追った。

「しかし、凡を汚すのは……」

情事の痕跡を使用人に見られようものなら、碧玉は気まずさで死にたくなりそうだ。

「では、こうしましょう」

「うわっ」

天祐は碧玉の腰を両手で掴んで、ひょいっと持ち上げ、くるりと一回転させた。おかげで碧玉は天祐と向かいあう格好で、膝に座るはめになった。一人掛け用の椅子だがどっしりした造りなので、そんな動きをしてもびくともしない。

荷物みたいに軽々と移動させられて、碧玉は複雑な気持ちになるが、当の天祐はしみじみと見入っている。

「はあ、このような蠟燭ろうそくの明かりで見る兄上も、美しいですね」

「そうまじまじと見るな」

天祐の焦げ付きそうな視線に、碧玉はたじろぐ。碧玉は、天祐の目を左手で覆う。その手を掴み、天祐は指先に口づけた。

「月光のような銀髪はもちろん、この白珊瑚しらえびのような肌もお美しいですよ。こうして肌に吸い付くと、新雪を踏み荒らしているような背徳感を覚えます」

碧玉の鎖骨の下に吸い付いて、赤い鬱血痕うっけつこんを残しながら、天祐は微笑する。碧玉は顔を赤らめた。天祐が碧玉を褒め始めると、どうしてもいたたまれない気持ちになるのである。手っ取り早く黙らせるために、碧玉は自分から天祐と唇を合わせる。

「そこまでにせよ」

「ふふ。はい」

天祐は笑って口づけを受け入れる。

碧玉は自分が美しいことを分かっているが、直に延々と褒められるのは苦手だ。今も恥ずかしさで、耳が赤くなっているだろう。

「ん、んん」

深い口づけを交わしていると、天祐の右手がずりりと碧玉の腰へ回った。下着の袴こに触れると、隙間から手を差し込んで、尻から下へと指を滑らせる。

「んっ」

天祐の手が性急に後孔に触れたので、碧玉は身を震わせ、思わず目の前にいる天祐の肩にしがみつく。それに気を良くしたのか、天祐は左手で碧玉の後頭部を押さえ、深々と口づける。水音が響くのを聞きながら、碧玉は上手く息がでなくなつて目の前がくらくらした。天祐の胸元を叩くと、天祐が碧玉を解放する。

「はあ、はあ。殺す気か」

「相変わらず息継ぎが苦手ですね、兄上」

天祐は愛おしげにつぶやきながら、几つくえの引き出しから小瓶を取り出す。

「なっ。天祐、執務室にも香油を置いているのか？」

「ええ。ここから兄上の部屋に直行することも多いので、予備は準備しておかないと。兄上に痛い思いをさせたくはありませんからね」

「……………」

喜ぶべきなのか呆れるべきなのか分からず、碧玉は口を閉ざす。

「ほら、兄上。ちよつと腰を上げてください」

促されて碧玉が椅子に膝立ちになると、天祐は碧玉の下着の袴こを躊躇ちゆうちよなく下ろした。動揺しているうちに、再び膝の上に座らされ、足に引っかかっている袴を取り去られてしまう。気づけば碧玉だけ裸にされていた。

そして、香油をまとわせた指で、天祐は碧玉の後ろへと触れる。

「んっ、んん、あっ」

こればかりは何度されても慣れない。碧玉の中に、天祐の右手の指が入りこみ、念入りにほぐし始める。思わず碧玉は、天祐の肩を掴む手に力が入ってしまう。それに気づいたのか、天祐の左手が、碧玉をなだめるように肌を優しく愛撫した。

次第に碧玉の体から力が抜け、それに呼応するように天祐の指の数も増えていく。

「そろそろいいでしょうか。兄上、つらかったら言ってください」

「あ？ ああ……んんんっ」

碧玉は天祐に腰を支えられて椅子に膝立ちになると、ゆっくりと天祐の陽物の上へ下ろされる。外出していたのもあつて、聞きは久しぶりだ。圧迫感のせいで碧玉は最初こそ眉を寄せたが、幾度か天祐に抱かれている体は、すぐに天祐を受け入れた。張り出した部分が入り、その硬い先端が碧玉の内側を刺激する。

天祐は碧玉の様子を見ながら、浅いところで碧玉の体を上下に揺する。

「あっ、待て」

「痛くありませんか？」

「それはないが……」

碧玉は天祐の肩にしがみつく。このままでは自重もあつて、最初から深い所に天祐の陽物が入りこんでしまうと焦った。そんな碧玉の様子を知ってか知らずか、天祐は碧玉の体を揺さぶって、良い所に当たるようにする。

「ん、ん、あっ」

「——っ。兄上、もう我慢できません」

天祐は碧玉の腰を掴むと、ぐいっと下へ下ろした。

「あああっ」

天祐の陽物が奥へと容赦なく叩きつけられ、碧玉は甘い悲鳴を上げる。

「あ……深いっ」

「ふふ。入れただけで達したのですか」

天祐が愛おしげにつぶやいて、碧玉自身に触れる。碧玉はビクリと震え、なんとか下を見た。天祐の衣に、碧玉が零こぼした白濁が散っているのを見て、顔を赤くする。

「衣を汚してしまったではないか」

「洗えばいいでしょう。几つくえは汚していませんよ」

そんなの詭弁^{きべん}だろうと、碧玉は天祐をにらむ。

「兄上、そんな涙目でにらんでも、かわいらしいだけですよ？ 俺の服なんて、いくらでも汚してください」

「お前も脱げ」

「駄目ですよ、椅子が汚れてしまいます。気になるんでしょう？」

憎たらしいことを言うものだと思玉が眉を寄せると、天祐は碧玉の目元をなめた。

「しょっぱいですね。なんだか甘そうに見えたのに」

天祐は心から残念そうに言い、驚いて目を丸くしている碧玉の唇に、再び口づけをする。至近距離で碧玉を覗きこむ天祐の青い瞳は、炎のように熱く見え、碧玉は自分だけ裸になっていることへの文句を呑みこんだ。

天祐は口づけをしながら、碧玉の腰を上下に揺さぶる。碧玉の体が下へ沈む時に合わせて、腰を突き上げるものだからたまらない。

「ひあつ、あつ、ああっ」

碧玉は天祐の肩にしがみつき、口づけを解いて、首を横に振る。刺激が強すぎてどうにか逃がしたいのに、膝に力を入れると、中にある陽物を締め付けてしまう。

「兄上、そんなにいいですか？」

天祐はふいに動きを止め、碧玉の耳元でささやく。そして碧玉の臀部^{でんぶ}を掴んで、ゆっくりと揉んだ。

「あ、うう」

碧玉は体を震わせる。臀部^{でんぶ}を揉まれると、後孔に入っている天祐の陽物に外側からも刺激される形になってしまい、切ない声が漏れる。

「なんだか今日は敏感ですね。もしや、執務室ですという背徳感に刺激でもされました？」

天祐が意地悪く問うので、碧玉はカッと顔を赤らめる。

「ちが……あああ！」

碧玉が否定しようとしたのと同時に、天祐は碧玉の腰を持ち上げ、一気に下まで落とした。天祐の陽物に容赦なくえぐられ、碧玉は背を反らして声を上げる。

「くっ」

天祐は耐えるような声を漏らしたものの、碧玉を揺さぶって、がらがんと突き上げる。

「うあつ、あああ！」

「兄上、兄上、愛しています」

碧玉は天祐にされるがまま、声を上げるしかない。天祐は碧玉を翻弄^{ほんろう}しながら、熱に浮かされたみたいに愛の言葉をささやいている。それを聞いていると碧玉も力が抜けてしまい、膝を支えていられずに天祐にしがみつく。すると、密着した体の間で自身をこすられて、それすらも甘い刺激になる。訳の分からぬまま、高みへと駆け上った。

「あああああ！」

「——っ」

くたりと弛緩した碧玉の体を、天祐はしっかりと抱きしめ、中へと精を放った。

翌日、まだ薄暗い早朝に、碧玉は天祐に抱きしめられた格好で目を覚ました。

（ここは……私の部屋か）

あの後、碧玉はすっかり腰が抜けて立てなくなってしまう、天祐に抱き上げられて運ばれたのだ。寝間着を簡単に着せられただけだったので、衛士とすれ違わずに済んで助かった。

（仕事場でことに及ぶなど……我ながらなんて不謹慎なことを）

もんもんとしているうちに、朝日が昇る時間帯になり、天祐も起きた。

「ふああ。兄上、おはようございます。まだ寝ていいですよ」

天祐は碧玉の額に口づけしてから、あくびをしながら起き上がる。

「おはよう。その……昨夜は邪魔をして悪かったな」

碧玉は気まぐしくなつて謝った。桃家について調べるつもりではあったが、帰宅した日くらい、天祐と一緒に時間を過ごそうと思っていたのも本当だ。

「兄上、謝らないでください。会いに来てくれて、私は嬉しかったです。おかげですっきりしていて、とても元気ですよ」

「そうか……？」

確かに、天祐は寝起きなのに元氣潑刺はつらつとしているが、碧玉は主に腰の辺りがだるくて疲れている。「受け入れる側のほうが体に負担がかかるものですから、休んでいてください。桃家の資料は後で

運ばせますので、今日は離れから出ないでくださいよ。その色気を他人の目にさらしたくありませんので」

そう言うと、天祐は碧玉の首に顔を寄せた。ちりつとした痛みが走り、碧玉は首に赤い痕をつけられたのを知る。

「見える所につけるな」

「見られたくなかったら、部屋にいてください」

「まったく、お前ときたら……」

碧玉を離れから出さないために、わざと痕をつけたようだ。こざかしい悪戯に、碧玉は呆れる。

「どうせろくに動けぬから、いらぬ心配をするな」

「念のためですよ。私は朝の稽古があるので、後で朝餉あさげを共にしましょうね」

天祐はそう言うと、碧玉に礼をしてから離れを出て行った。

（天祐に毒されてきておるのだろうか）

普段の自分ならしない行動を思い返して、碧玉は灰炎が朝のあいさつに来るまで、しばらく一人で恥ずかしさにもだえていた。



黒家での花見の宴から数えて一月近く経ち、碧玉達はようやく桃家の本拠地である緋丘ひきに到着

した。

黒家の馬車の窓から顔を出し、紫曜が歓声を上げた。

「ここが緋丘か、ようやく着いたな！」

後ろを走る白家の馬車内でその声を聞いた碧玉は、大帯に差ししていた扇子を開いてぱたと扇ぐ。

「まったく、一人で騒がしいやつだ」

「まあまあ、兄上。ここまで長旅でしたから、紫曜殿がお喜びになる気持ちも分かります。まさか白家から桃家まで、陸路で一月もかかるとは」

「まったくだ。白領内であれば、鳥の式神に乗って移動すればいいから時間短縮もできるのだがな」

「領地を飛び回ることに、他家の者は良い顔をしないでしょうからね」

天祐は苦笑いを浮かべた。

碧玉としては、白家の防衛上の秘密にも関わるので、式神で空を飛べることを他家に広めたくはない。

それに加え、天祐が懸念を示したような問題もあるので、他領では式神での飛行をしないようにしている。他家にしてみれば、わざわざ屋敷を高い堀で囲んで悪党が中に入れないようにしているのに、式神を使って白家の道士が空を飛んでは、警戒して当然である。それでもめて、いちいち足止めをくらうほうが面倒というわけだ。

そういう理由で、碧玉達は大人しく陸路で旅をしてきたのである。

白家から桃家に行くためには、西隣の緑領を通過するか、いったん都のある中央部を経由する道を使うのが普通だ。今回は緑領を通り抜けてきた。

「緑領は本拠地のある町以外はほとんど険しい山地ですし、桃領に入ってから山道続き……。正直、私も山ばかりで飽きましたよ。おや、あちらをご覧ください、兄上。ここは斜面に畑を作っているんですね。綺麗な所です」

先ほどまでため息をついていた天祐は、今は窓の外に目を向け、弾んだ声で言った。窓には幕がかかっているが、今は風を入れるために半端に吊り上げてとめている。碧玉は天祐のいるほうの座席に移動すると、外を見た。天祐の言う通り、白領では見慣れない景色が広がっていた。

急こう配の山の斜面に、段々になった水田が並んでいる。水が光を反射し、まだ短い稲が風に揺れていた。

「ほう。狭い土地を有効活用しているのか」

「兄上、この道をまっすぐに行くと、丘の上にある桃宗主の屋敷に着くそうですよ。桃家の名にちなんで、辺り一帯に桃の木を植えているとか。春には緋色に輝いて美しいそうですが、盛りが過ぎた今は青々としていますね」

「新緑もよいものだ。うわっ」

「おっと、車輪が石を踏んだようです。兄上、大丈夫ですか？」

馬車がガタンと大きく揺れ、碧玉は体勢を崩したが、天祐にしっかりと抱きとめられた。

「ああ」

過保護な天祐は、碧玉を支えて向かいの席に座らせてから、自分の席に戻る。

「ここに雪瑛せつえいがいたら、踏んでいただろうな」

「雪瑛なら、御者台にいる青鈴にべったりとくっついてますよ」

碧玉の下僕である妖怪の白狐、雪瑛は天祐の侍女である青鈴にすっかり懐いている。雪瑛は雌なので、青鈴と仲良くしていると、種族違いの姉妹のように見えるから不思議だった。

「それは、お前が雪瑛をにらむからだろう？」

「兄上の膝に乗るだけでなく、撫でられてずるいからです！」

「まったく……」

あんな小さな狐にまで嫉妬する天祐を、碧玉は呆れのこもった目で眺める。普段は寛容な好青年なのに、碧玉が関わると途端に心が狭くなるのは相変わらずだ。

「そういえば、兄上は桃領には初めて来るのですか？」

「ああ。月食の災厄の時、桃領へ続く山道の近くまでは来たのだが、往来する者達に聞いてみたところ特に問題ないと言うのでな。当時は都の近辺のほうが危なかったゆえ、そちらに向かったのだ。今にして思えば、あの霊山の妖怪が妖邪どもを抑えつけていたのかもしれない」

「ああいった妖怪は縄張り意識が強いですからね。それに、あの災厄で活気づいた妖邪を餌えさにして、力をつけていたかもしれませんよ」

「しかし、桃家からの救援依頼は来ていない。そもそもあの家には、昔、白家の先祖が授けた破邪

の鏡があるから、よほど強い邪でもないと思っけぬだろう」

調べもの初日に天祐と熱い時間を過ごしてしまったものの、旅に出るまでに、碧玉は桃家について調べなおしていた。それで、白家に伝わる昔話を思い出したのだ。

「桃の木も邪を寄せつけぬゆえ、自然と結界のようになってる」

「えっ、待ってください、兄上。桃家は、白家の先祖と関わりがあるんですか？」

「ああ。大した昔話でもないから、お前が知らぬのもしかたがないか。白家の先祖に、桃家と親しくしていた者がいてな。当時の桃宗主が妖怪の悪さに悩んでいたから、破邪の鏡を作ってやったと聞いている。白明鏡はくめいきやうという名だ」

「わあ、それはぜひとも、一目拝見したいものです。先祖の法具ならば、素晴らしい物に違いありません」

道術に関心が強い天祐は、子どものように目を輝かせた。

（ああ、それである書物……『白天祐の凱旋』では、桃領は薬草を手に入れに寄るだけだったのだな）

自分で説明しているうちに、碧玉は納得した。前世で読んだ書物では、主人公の天祐は、各地の妖邪を退治して回るのだ。新しい土地に行けば、一人のヒロインと出会うという流れなのに、桃領編は、病気になる女性の仲間のために天祐が奔走する話だった。

（確か、桃宗主には息子と娘が一人ずついたが、娘は不慮の事故で亡くなったのだったか？ 書物では、この時期にはすでに娘はいなかったはず。だが……）